

税金と歩く

八代市立第五中学校 3年 福嶋 悠瑞花

「税金についての作文か。消費税について書けばいいな。」先生が作文の説明をされたとき、私はこう考えていた。

夏休みのある日、私は整形外科に通院した。その際、お医者さんは「その靴にも税金が使われているよ。」と話された。いつも履いているこの靴に税金が使われていることに驚いたし、私は税金について何も知らないことを実感した。

私は一歳の時に、扁平足になった。小学校二年生からは凹足という足が変形する病と共に生きている。凹足はハイアーチともいい、土踏まずが通常より高い状態になる。そのため足の前部と後部でしか体を支えられない。安全に歩くためには専用の靴が必要になる。一年半ごとに靴型の装具を作り今まで履いてきた。

去年、新しい装具を作る際に「補装具費支給制度」を利用することができた。

「補装具費支給制度」とは車椅子や義肢などの補装具を作り替えたり、修理したりする際に、費用の多くを市町村が支払ってくれる制度である。そのお金の税金が使われていることを知った。母はこの制度について、

「支給制度があってよかった。みんなが納めた税金だから、靴を大事に、きれいに使いなさいね。」と話してくれた。

靴がないと夜中は眠れないほどの強烈な痛みが襲ってくる。靴がないとふわふわした歩き方になる。私の生活にとって、装具は必須のアイテムだ。この道具は税金という人々の手助けで作られている。今までこのことを知らなかった。知らなければ、税金という人々の思いやりに感謝をすることさえ、できなかった。

私にとって税金は「大人」というイメージがあった。しかし、この作文を書くにあたって、私のイメージは一変した。教育の充実、警察や救急車などの公共サービス、学校や公園などの公共施設。どれも私の靴と同じで当たり前のものと錯覚していた。今後、少子高齢社会の日本では社会保障費は増加し、一人当たりの税金の額も大きくなる可能性がある。この時に、税金に対して不満をもつだけでなく、税金が何に使われているのかを知り、身近に使われる税金に感謝できる世の中になってほしい。きっと私の靴のように身近なものに税金は使われているのだから。

この十五年間、私は常に装具と共に歩いてきた。そこには税金が使われている。これからも装具、つまり税金と共に歩き続けるだろう。支えてくれる税金に感謝し、さらに私も税金を納めることで、同じ病気に苦しんでいる人を支えていきたい。